

## 盲人のための手引き

わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。イザヤ42：16

かつて私は、白い杖を持つ目の不自由な友達と一緒に住んでいたことがありました。しかし、私たちが一緒に出かける時はいつも、彼は杖を置いて行きました。私と出かけるとき、彼は杖を必要としないという信頼の証しとして、私はそれを受け止めていました。明らかに彼は、ガイド役として私を信頼してくれました。

私たちが街の通りを歩くとき、彼は絶え間なく語り続けたものです。彼がそうするのは、私が彼の側にいることを確認するためだと思います。時々、念のために軽く手で私にさわることもありました。彼の関心は、私の近くにいることだけに集中していました。私の側にいれば、道にある障害物をよけながら導いてくれると彼は心から信頼していたからです。

このように、目の不自由な人が自らの安全をだれかに委ねるには、大いなる信頼が必要だと私はよく思いました。しかし、この一点だけに焦点を当てることは、人生をシンプルにもしてくれます。ただあなたを導く人にだけ、注意を注げばいいのです。もし、その人を信頼できれば、あとはその人の動きを追うこと、そしてその人の近くにいるだけで、足下の障害物はみな避けて通ることができると安心できます。おそらくあなたは、この黙想で私が話そうとしている意図をすでに察しておられるでしょう。

自分では見えていると思っている、実際には人生において自分が認めるよりはるかに私たちの目は見えていないものです。自分がどこに向かっているのか、目の前にどんな障害物があるかなど、私たちにはよくわかりません。しかし、たとえ自分の目が見えていないと認めたとしても、たいてい私たちは白い杖を選びます。自分の視力を埋め合わせてくれる、助けになりそうな何かを選びます。目の前にある状況を懸命に推測しながら、一生を通して自分の道を手探りで探し続けます。

しかし、私たちには、目の不自由な私の友達が取った同じ選択肢もあります。白い杖を置き、代わりにイエスの衣服をつかむという選択です。おそらく、時にはイエスが側にいるか確認するために、軽く彼をさわりながら……。祈りの中で私たちの不安をイエスに差し出すようによく教えられるのも、そのためでしょう。確かにそうすることによって、私たちはイエスが側にいるという安心感を得ることができます。

質問：

1 ヨハネ9：41で、パリサイ人は見えると言い張るので、実際には盲目であるとイエスは暗示しています。同じ教訓が、どのように私たちにも当てはまりますか。自信たっぷり「見えている」と思っている自分の人生や将来について、あなたはどのような確信がありますか。

2 見えないことが普通だと認識し、もっと神の導きに頼らざるを得ないとしたら、あなたの人生はどのように変わるでしょうか。

3 目の不自由な人がするように、イエスが側にいるか確認するため、あなたはどのように日々イエスにふれますか。それは、先が見えない恐れをどのように打ち消してくれますか。

**祈り：**目が見えない恐れと共に、自分の身を守り、人生で神がなさっていることを先読みしたいという不安を神に告白してください。人生で不確かな時にあっても平安でいられるよう、さらに信頼する霊を与えてくださるよう主に求めてください。